

並べ朝夕親んで居つた友は、最も水彩畫に熱心であつて、常に筆を採つて畫き、自慢顔に余に示すのである、其度ごとに余は水彩畫は最も高尚なものである、最も趣味のあるものであるといふ觀念を得たのである。

余一日友に向ひ「君水彩畫を畫くにはどうすればよいのだ、教へてくれ給へ」と、言ふと友は机の引出しから一冊の本を出し余に示して「これを讀み給へ、水彩畫は如何なるものであるかと言ふ事がわかる」と、教へてくれたのである、これ即ち『水彩畫階梯』であつたのである、一讀また一讀……大に水彩畫の趣味を解したのである、そこでちきに筆をとる氣になり一枚を畫いた、勿論畫にならなかつた、友に注意を受けて數枚を畫くとやつとの事でこれと言ふ一枚を得た、しかし完全とは言へない、大きな聲で水彩畫と言へないけれども大奮發して圖畫の教師に見せると初めてにしては上出来なりとの詞を給はり大に力を得益々この道を研究する様になつたのである。

□御見舞に水彩繪具

美濃 蒼海



相生橋

後藤百次

らく病氣で一室にふさいで居りますと、兄さんが私に水彩繪具を見舞としてくれました。

其時から繪がすきになりました、新聞の挿繪などを彩色しました事は非常に澤山でした。高等科を卒業するまでに一箱三錢五厘の甚だ悪い繪具でしたが十箱ばかりは使いました。中學校へ來てからは圖畫の時間は澤山あり、繪具は善いものが手にはいい、先生は非常に上手な方で、私は喜び勇んで益々勉強しまして、今ではすこしばかりは畫ける様になりました。全く私は病氣見舞の繪具が動機となつたのでありまして、此様な例は他にも少くないだらうと思ひます。餘事ではあります先日時事繪葉書にあつた露の干ぬ間の朝顔を模寫して友人にやりましたら大層はめて一句

朝顔の瑠璃の色こそ嬉しけれ

嬉しさに又かいて友人二人に出しますと共に

失望のわれに朝顔咲けりとは

朝顔に暫し見とるゝ我身哉

とありました之れも水彩畫の一の利益でせう